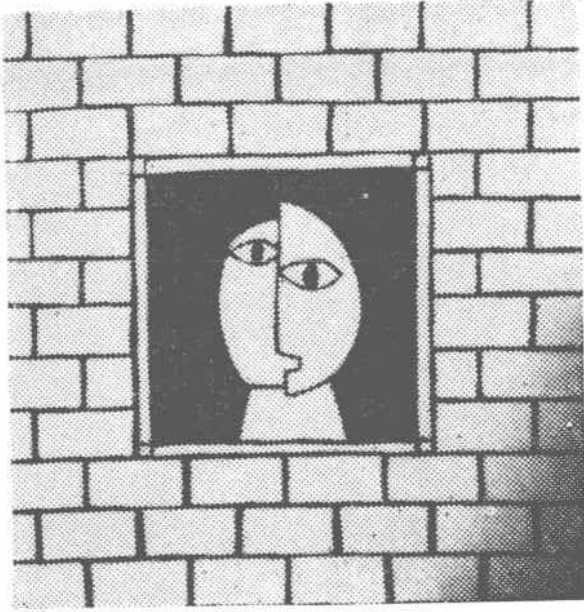


日本ミステリ・シリーズ

4

eries 4

結城昌治



早川書房

著者略歴

昭和2年2月5日東京生れ

現住所 東京都渋谷区代々木3の46 神宮荘6号

主著書

「ひげのある男たち」(早川書房刊)

「天上縊死」(早川書房刊)

「長い長い眠り」(光文社刊)

「仲のいい死体」(光文社刊)

「畏の中」(新潮社刊)

第四回配本

定価三二〇円

ゴメスの名はゴメス

日本ミステリ・シリーズ

第四卷

昭和三十七年四月二〇日 印刷
昭和三十七年四月三〇日 発行

著者 結城昌治

発行者 早川 清

印刷者 堀内文治郎

発行所 早川書房

東京都千代田区神田多町二丁目

電話 東京

四〇五六・二六〇・二六〇
四三六八・二六〇・二六〇
(編集)

用紙・四国製紙KK/クロス・日本クロ
スKK/印刷・KK堀内印刷/製本・堅省堂

ゴメスの名はゴメス

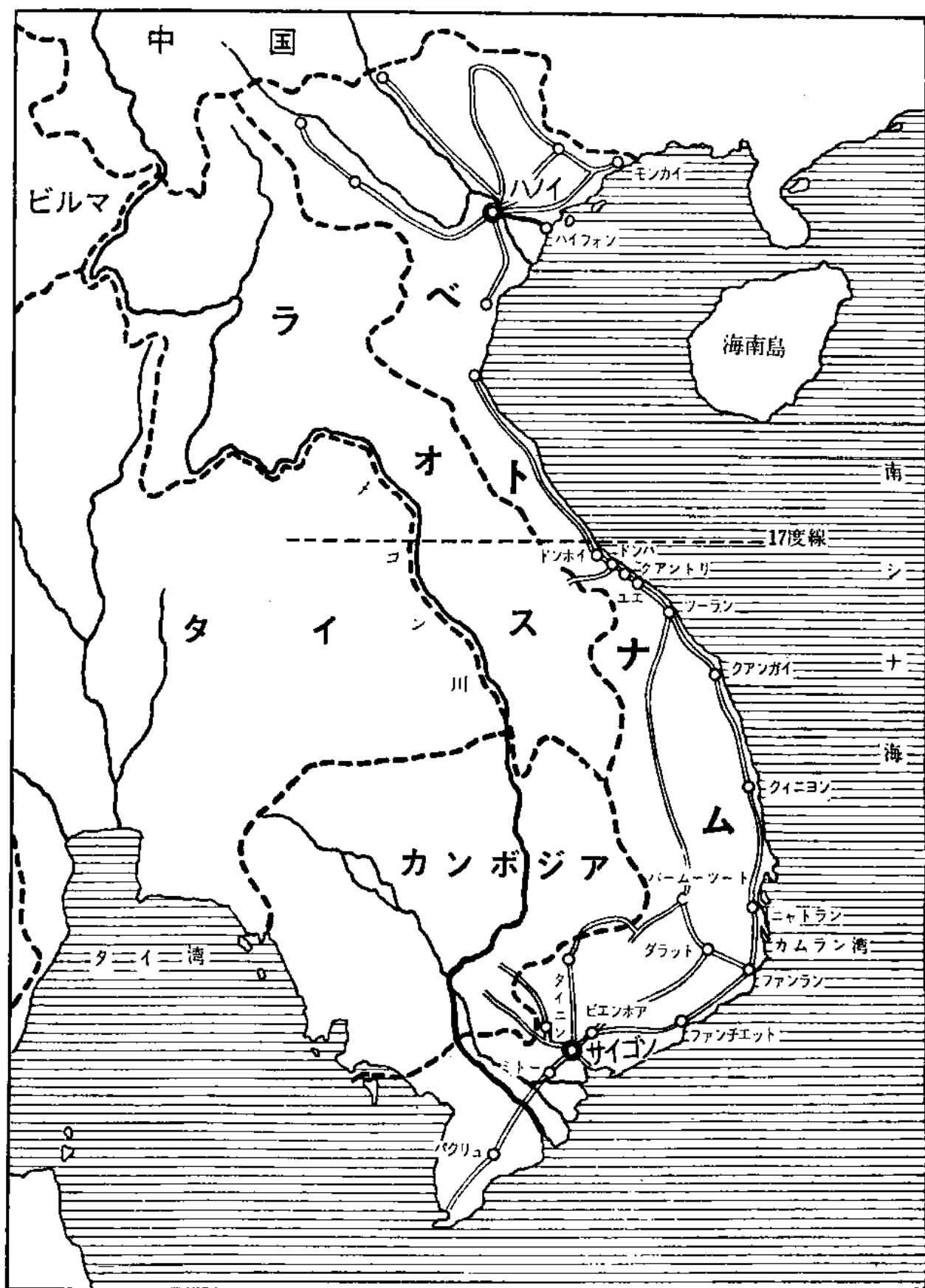
福永武彦氏におくる

感謝とうらみとをこめて――

ぼくがミステリを書くようになったのは、
あなたのせいだから。

目次

第一章	失踪者……………	五
第二章	仮りの名をゴメス……………	三
第三章	スパイの本質……………	一四
第四章	告別……………	三五
あとがき……………		二八



第一章 失踪者

初めてリエンに会ったのは、サイゴンに着いたその夜のことだった。マジエスチック・ホテルのクロークにトランクを預けてから、わたしはシクロ（輪タク）を拾ってコバック街の社宅へ向かった。サイゴンは初めての土地ではないし、社宅にも一年ほど住んでいたことがあるから、道順は分かっていた。行方不明になった香取の代わりに、現地採用社員のナムがいるかと思って訪ねたのである。

しかし、怪訝そうな表情で出迎えたのは、見知らぬベトナム女だった。黒い艶のある髪を肩のあたりまで垂らして、年は二十才か二十一才位だろう、どことなく子供っぽい感じで、黒瞳があの大きな眼が印象的だった。

「ナムさんはいますか」

わたしは自分が日南貿易の社員で、東京の本社からきたことを告げてから訊ねた。

女はフランス語を解した。

「ナムさんは事務所におります」

「ここへは来ないんですか」

「来ません。ナムさんは事務所です」

「すると、ここはあんた一人ですか」

「はい」

ペトナム訛りの、しかし声は美しいフランス語で、女はわたしを室内に招こうとした。眼の色に、かすかな不安が読み取れた。

「あんたは留守番を頼まれた人ですか」

わたしは玄関のポーチに立ったまま言った。

「リエンといいます」

「今夜はもう遅いから、明日また出直してきましょう」

わたしは腕時計を覗いて立去ろうとした。すでに十時を過ぎていた。

「待って——」

リエンは呼び止めた。泊っていけないというのである。わたしは断った。リエンは困惑の色を示した。そして実際に、このまま帰られては困ると言った。わたしは問返さなかった。問返せば、彼女がさらに困ることが分かっていた。

「お願いします——」

リエンの眼は真剣だった。

わたしはやはり断った。

ホテルに戻ると、トランクは四階の部屋に運んであった。

シャワーを浴びてから、ベッドにもぐった。エア・コンディションがきいているので、外の暑さを忘れて眠ることができる。しかしわたしは眠れなかった。神経が昂ぶっていた。

瞼を閉じると、リエンの顔が浮かんだ。白い絹の褌ズボン子と、腰のあたりまで裂目スリットの割れている花模様のベトナム服、その立襟の上に細い首を傾けて、物悲しげに瞬いていた眼――。

――香取はあの女と暮していたのか。

わたしは瞼を開いた。天井は暗く、何も見えなかった。

香取が失踪してから、ちょうど一ト月経っていた。その報らせが東京の本社に入ったのは、ナムからではなく、合同通信の記者でサイゴン日本人会の幹事をしている森垣靖介からだった。それも、香取が消えて半月も経ってからの知らせである。もし本社からの照会がなければ、知らせはさらに遅れたかもしれなかった。姿を消したという日の三日後、香取は東京に帰任するはずだったのだ。そしてわたしが、彼と交替でサイゴンへ赴任する予定であった。

なぜ、帰国を眼前に控えた香取が姿を消したのか、森垣の手紙は要領を得なかった。

わたしは本来の職務に、香取の行方を探がす義務を加えられて羽田空港を発った。そして最初に知った事実が、リエンというベトナム女の存在であった。

翌朝、ホテルを出ようとしていたところへ、シヨロンで中華料理店を開いている陳が訪ねてきた。

「お待ち申しておりました」

一年ぶりくらいで会う陳の挨拶は慇懃だった。背の高い恰幅のいい男で、白い麻の背広を着た姿は中華料理店のおやじに見えなかった。かつて、わたしはこの男の上眼遣いが嫌いだったという記憶しか持っていない。

「よくぼくの来たことが分かりましたね」

わたしは不審に思つて訊ねた。それに、彼の来意がわからなかった。

「今朝早く、リエンが知らせてくれたのです」

「香取はあの女と暮してたんですか」

「はい。しかしリエンは女中です。香取さんのお食事と洗濯のお世話をするために通つていただ

けです」

「ふうん」

わたしは陳の言つたことを信用しなかった。

「リエンはいいい娘でしょう」

陳は言った。

「きれいな眼をしている」

「お気に入りましたか」

「気に入ったとしたら？」

「月に四千ピアストル（二万円）でいかがですか。お世話させてやって欲しいのです。社宅に住みになってください」

「香取が帰ってきたらどうする」

「香取さんはもう帰りませんよ」

「なぜ」

「このサイゴン市内では、毎日何人かの人を姿を消しています。帰ってきた者はいませんし、発見されたときは死体になっています」

「なぜだ」

「わかりません」

「警察は何をしているんだ」

「死体が見つかれば騒ぎだします。しかし、何の役にも立ったことはありません」

「ベトコンに殺^やられるのか」

「そうでしょう」

陳は風に吹かれているような顔つきで頷いた。

南ベトナムにおけるベトコン（北ベトナム共産党）のゲリラ活動が最近とくに激化してきたこ

とは、新聞その他のニュースで伝えられている。以前は北方の山岳地帯の村落に出没していたのが、近頃では数百名から千名を越える大部隊をもってサイゴン周辺の都市を攻撃するようになっていたのだ。そしてサイゴン市内でも、政府の要人、医師、教師などが誘拐され、それらの死体がサイゴン河に浮かんだ例も二三にとどまらない。目的は人心の攪乱と政府組織の破壊にあり、ベトコンの背後にソ連中共の支持があることは、ゴー・ディン・ディエム政府の背後にアメリカが存在していることと同様であった。フランスを敵として八年間のインドシナ戦争を戦い抜き、辛うじて民族の独立を得たベトナムの、世界の冷戦にまきこまれた結果が、互いに対立する南と北との共和国に分断されて今日に及んでいるのだ。

香取が姿を消した理由は、確かにベトコンの仕業と考えるのが順当ではあろう。彼らの眼からみれば、日本商社員もゴー政府側に組する敵の一人にちがいないのである。

しかし、わたしは香取の失踪をベトコンの手で消されたものと断定したわけではない。一人の男が姿を消すには、なお幾つもの場合が考えられるし、はっきりした理由が本人自身にさえ分かってなくても、人間というやつは自分を消したくなることもあるものなのだ。

「香取がいなくなってから、もう一ト月になる。何か彼について噂を聞かないか」

「聞きません。香取さんがいなくなったのは九月八日、で夜の九時頃香取さんを見たという人がいますが、それっきりです。わたしは、香取さんが三日も帰らぬというリエンの話で知りました」

「金の牛」はショロンの繁華街のはずれにあるキャバレである。

「金の牛」で香取を見た人というのは？」

「フンさんです」

「何をやっている男だ」

「フンさんを知らないんですか」

「知らない」

「グエン・フェで貿易会社をしています」

「すると、うちの事務所の近くだな」

「つい眼と鼻の先ですよ」

フランスの植民地支配から脱出した南ベトナムの民族意識を、最も端的に物語っているのが街路名の改変だろう。以前はフランスの将軍や総督たちの名を街路名にしていたのが、独立後は殆どベトナム名に変えられている。パリ風のシックな街路として有名なカチナ通りが自由通りフー・ドゥーに変わり、舗道にテラスを張りだしたレストランや花屋の立並ぶブルヴァル・シャルネがグエン・フェ通り、もとオペラ座だった国会議事堂から中央市場へ至る目抜き通りボナールがレ・ロイ大路というように変わり、氾濫していたフランス語の看板なども、今はほとんどベトナム語に書きかえられている。これは華僑の街ショロンでも同様で、看板の漢字はベトナム文字の下にルビのように加えられているだけだ。

「リエンのこと、どうでしょうか」

陳は話を戻した。

「考えておくよ」

「リエンは泣いています」

「泣く必要はない」

「坂本さんがいい返事をしてくれないと、リエンは社宅を出なければなりません。そしてまた辛い仕事をしなければなりません。可哀想です」

「だから考えておくとやっている。すぐに社宅を出ろとは言わない」

「駄目なんですか」

「まだ考えがつかない。あんたが嘘を言っている間は、はっきりした返事はできないだろう」

「嘘は言いません。リエンは女中をしていただけで、香取さん」

「それでは、香取の女はほかにいたのか」

「知りません」

「とにかく、今日は返事ができないな。気が向いたらこっちか」

わたしは執拗にいきさがる陳を追い帰した。

リエンに対する四千ピアストルという報酬は、いうまでもない。女中ならそんな高額を払いはしない。わたしに女を取り持